

# 明日への提言

若者が時代を変える



**災害は社会の脆弱な部分をあぶり出す**

——震災後、社会にはどんな変化がありましたか？

**定池 祐季** 「災害とは何か」を考えると、「社会の脆弱な部分を暴くもの」という見方があります。今回の震災は被災地域が広域で、かつ、複合的な被害をもたらしました。そのため、取り組みが遅れていたたり、見えていなかったりしたさまざまな課題があぶり出されてしまいました。災害研究の面では、直近の津波災害である北海道南西沖地震の知見が踏まえられていないという反省があります。過去の災害の教訓を伝えていくことの必要性を強く感じます。

**藤井 賢彦** 震災後に始めたりリー講演会(※1)では、最初のころよりは、エネルギー問題について実のある話ができるようになったと思います。いままでは電力会社のデータ開示も十分でなく、原子力は安いという前提

で話をしていました。原発維持派と反対派で議論の基にするデータが違ったりしたのが、お互い勉強し、少しずつですが議論の質が上がってきたと思います。

**橋本 努** もともと朝日新聞は基本的に原発推進でした。原子力を平和利用しようという立場だったので、事故後もすぐには批判的な記事が書けなかった。それに対し、私が書いている朝日WEBRONZA(※2)は、何でも言える自由さがありました。その後、朝日新聞本体もだんだん態度が変わり、今では「脱・原発依存」になってきました。マスメディアの対応の仕方、この数カ月でかなり変わってきたと感じます。

※1 リレー講演会：「本当に原子力発電なして、やっていける？」をテーマに、学内外のさまざまな立場の専門家がリレー形式で議論を重ねていくことを狙った連続講演会。2011年度は8回実施した。

※2 WEBRONZA(ウェブロンザ)：朝日新聞社がWeb上で運営しているニュースサイト。第一線の筆者陣による迅速な解説や独自の論考を展開している。  
<http://webronza.asahi.com/>

## 地域の現実と 将来像をつなげたい

—— 長期的な復興のためには何が  
必要でしょうか？

**定地** 現場に入っている研究者は被災者や被災地のことを考えていますが、離れるとどうしていても、これから日本をどうするといった話になってしまいます。現場を見ずに大局を語ると、リアリティがなくなってしまう。そこをつなげなければと強く焦りを感じます。被災地の報道もだんだん減っていますし。災害研究も理学や工学の分野は充実していますが、人文・社会科学系の研究者が少ない。人や社会にまなざしを向けた災害研究者が増えてほしいです。防災や復興は地元が主力になるべき。災害の多い北海道でも防災から復興までカバーできる人材がもっと必要です。でも、災害社会学に携わっているのは北海道でたぶん私一人なので、仲間がほしいと痛切に思います。



佐伯 浩 (さいきひろし)

総長  
工学研究科教授 大学院工学研究科長・工学部長、高等教育機能開発総合センター長などを経て2007年より現職

に温度差がある。例えば農業と水産業の方では土地への意識に大きな差が出てくる可能性があります。隣地域同士で、情報や将来構想をある程度共有しながら進めていくことが大事でしょう。

## 価値観の違いを 認識したうえで まちづくりを

**佐伯 浩** 災害から数カ月経つと被災した方の心理が変わってきます。奥尻島の例でもそうでしたが、自分の年齢とかを考えて、いままでどおりのところになりたいと必ず思うようになる。それで行政が慌てて折衷的な対応をすると、膨大なお金がかかって予算が足りなくなる。今回は広範囲で、国の財政もはるかに厳しい。しかし対応が遅れると、被災者と国や行政の間にギャップができてしまいます。また、地域の人のにも考え方

サステイナビリティは単に環境の問題だけでとらえられることが多いですが、「サステイナビリティ」環境ではまだ甘いと思います。二酸化炭素を減らすだけでなく、人の価値観や幸福を考えることも必要ですよね。どんな場合でも、人によって価値観が違うという現実を認識したうえで合意形成をしないと、でも、そうした研究は非常に少ないのが現状です。

**藤井** 環境やまちづくりを考えるとときに使われる「サステイナビリティ」という言葉は定義がいろいろありますが、要は「環境」「人間」「経済」の三つを重ね合わせた「持続可能な社会」を指しています。いまの社会での持続可能性を考えるのか、次の世代につなげるのかでも理想像は若干変わりますし、みんなの理想もそれぞれ違います。

**橋本** 北大の地球環境科学研究院の先生が中心となって、最近「二〇五〇年委員会」(※3)が立ち上がりました。いまから四〇年後、どれだけ人口が減少するか予測なども含め、そのときどういうまちができていくのかを、みんなで考える場をつくる。そうやってグラントデザインを描いていかないと、総長の言うように常に予算が足りなくなつて、大きなことが実現できない。大学の役割は、そうした長期的なビジョンや議論の場を提供して、まちづくりをもつ

※3 2050年委員会：北海道大学に所属する異分野の研究者が集まってスタートさせた、文字通り2050年の未来社会のあり方を構想する試み  
<http://www.facebook.com/2050committee?sk=info>

と生産的に考えることだと思えます。

## 大学はニュートラルな立場を活かせ

——北大が果たすべき役割は？

**定池** 大学はまず人を育てるところなので、サステイナブルな感覚をもっている人たちをどんだん育てていくことが大切だと思います。災害や環境に限らず、北大の卒業生はいろいろな分野で活躍していますから、それから、いまは地震火山研



### 橋本 努 (はしもと つとむ)

経済学研究科 教授

専門は経済社会学。著書多数。震災後は朝日新聞社WEBRONZAなどで福島原発の問題点について積極的に発言するほか、マスコミや内閣府が主催するシンポジウムなどで講演を行う。

何か背負うものがある、やはり大学はニュートラル(中立的)ですね。研究所などはあっても、同じデータでも言い方が違ったりしますが、そこをニュートラルに言える。大学にいてよかったと思うことがこの半年で何回かありました。まちづくりとか、ステークホルダー(利害関係者)が集まる

ときも、行政に代わって大学が主体になる可能性があるのではないのでしょうか。  
**佐伯** 大学にそういうオーガナイザー的な機能を果たすグループがあるといいですね。それがCoSTEP(※4)の大事な仕事だと思ってるんですよ。災害についても、急ぐものと、これから日本人としてじっくり考えなければならぬものを分けて、講演会などを企画してもらえるといいと思います。  
**橋本** 大学には二つの顔があると思います。ひとつは、理系の研究者がビッグビジネスの一端を担うということ。国や民間企業などいろいろなところからお金を得て、そういったある種の利害の中で日本社会をどうするか考える。他方でもうひとつ、大学は自由に論ずることができません。例えば今回の泊原発をどうするかという話でも、利害の一端を担っているとなかなか反対しにくい。そこで大学が、利害関係なく自由に長期的な

自分の哲学があれば変化にも対応できる  
——これからの社会を生きる若い世代には、どのような価値観が大切でしょうか？  
**佐伯** 北大は昔から「フロンティアスピリット」を掲げてきました。学生には、自分たちの将来のために最も大事なことを、解決しなければならぬことに積極的にチャレンジしてほしいですね。こういう産業分野の景気がいいからこの分野に進みな

ジョンを描いて提供していくという役割があると思います。



※4 CoSTEP (コーステップ)：科学技術の専門家と市民との間を橋渡しする人材「科学技術コミュニケーション」を養成する組織。大学内や地域社会で、双方向的な科学技術コミュニケーション活動を展開している。『リテラポリ特別号』編集・制作も手がける。<http://costep.hucc.hokudai.ac.jp/>

さいなどと周囲に言われたりするでしょうが、人気分野に左右されず、日本や社会が困っている問題に挑戦してほしい。いまの時代は国際化もあって非常に変化が激しい。二〇年、三〇年

後には時代が変わっています。一人ひとりがきちんとした哲学をもって、時代の変化に対応できることが非常に大事。それで、北大は一年次の成績によって二年次に進級する学部を決める総合入試(※5)を導入しました。社会を見て世間を知って、そして進路を決めたのは私なのだ、そういう強い意識をもって、自分の人生は自分で決めてほしいと思います。

## いま、第二の文明開化のとき

**橋本** 二〇五〇年の日本社会はどうあるべきなのかを、高校生や学部生の段階で考えてほしいですね。あと四〇年で原発をすべて廃炉にするとしたらどういう社会が描けるのかを、利害関

係なく自由に考えられるのは、やはり大学生の特権だと思います。たくましくイマジネーションをもって議論するということが重要ですね。

今回の大震災と原発事故は、第二の文明開化に値すると思っています。日本史の中で、これだけ大きな事件あるいは事故はないだろうと、それくらい大きな社会変動の中に我々は遭遇しているのだと。江戸時代から明治時代が変わったときは、意思決定システムの変革がありました。志ある人たちが横のコミュニケーションを通じて社会を変えていった。それまでの江戸幕府のシステムは上意下達、上から言われたことを忠実に守るというものでしたが、それが崩れた。現在で言えば、電力業界や政府が中心となって築いてきた計画経済的なエネルギー政策、上意下達のシステムを壊せるのかどうか。もう一度、横のコミュニケーションを通じて新しい社会をつくっていくことができるのか。いま試

されています。

福沢諭吉の『学

問のすゝめ』の要

点は、我々民衆が官僚に代わるよ

うな知識をもたな

ければ、常に官僚

たちによって支配

されてしまうとい

うことです。だから

ら官僚に対抗し得

る知識を身につけ

ることが重要な

だと言つて、文明開化を引っ張つ

ていったんですね。我々にいま必

要なのはそういうことで、電力

や震災の問題について官僚に対

抗し得る知識をもって、代案を

示せるような力が求められている

んだと思います。

## まわりや未来への想像力を もってほしい

**定池** 若い人たちには想像力をもつてほしいです。いままわりで起きていることを「わがこと」



藤井 賢彦 (ふじい まさひこ)

地球環境科学研究院 准教授

専門は海洋学。2011年6月より「ほんとうに原子力発電なしで、やっていける？」をテーマに、学内や民間の有識者を招いたリレー講演会を運営。

として考えてもらいたい。

私はもともと心のケアを学ぶつもりで文学部に入ったのですが、もつと広く、被災地の復興を考えたいと思つて災害社会学を学びました。奥尻で復興過程の苦勞話を聴いていると、復興だけではなく防災も必要だと思つただけではすまない部分が多いので工学部や理学部の先生にもお話を聞きに行つたりしました。学びたいという意欲があれば、先生方は喜んで付き合つてくだ

※5 総合入試：2011年度から導入した入試制度。総合入試で入学した学生は、自分の希望と一年次の成績によって二年次に進級する学部が決まるので、幅広く教養科目や基礎科目を学びながら、より自分に合った進路を選択することができる。  
<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/nyu/nyushikaikaku.html>



**定池 祐季 (さだいけ ゆき)**

理学研究院附属地震火山研究観測センター 助教  
奥尻島で被災した経験から災害研究を志し、北大大学院文学研究科で奥尻島、有珠山周辺地域の復興を研究

像力もないと、その先、将来の身は立たない。いま被災地でどういうことが起こっているかを客観的に判断できるような人間になつてもいいです。それから一般教養も大事です。サステイナビリティを考えるうえでも。

個人的には、詰め

込み教育はそんなに悪いことじゃないと思います。詰め込むことができるうちは、騙されたかと思つてやってみたらいい、英語でもなんでも。年をとつてからやれと言われても、悔しいけど入つてこない。若いときに詰め込まされたのが、いまものすごい役に立っています。

**「やればできる」と思える**

**明るい希望に満ちた**

**社会をつくらう**

佐伯 橋本先生も言われたよう



開催日：2011年11月9日(水)  
開催地：北海道大学 ファカルティハウス 「エンレイソウ」  
聞き手：小菅 千絵 (右端・CoSTEP 受講生)

に、時代を変えていく、あるいは時代を変えられるという意識を若い人にもつてほしいですね。我々もそれをバックアップして、若い人たちが目を輝かせて将来を楽しみにするような国にしなきゃいけない。国民を挙げて今回の災害をいかに克服していくか、次の世代に引き継げるかという努力をきちんとすれば、若い人たちが「私たちだっ

てやれば克服できるんだ」と思える明るい兆しを見せることができると思いますね。  
ただ、みんな「だれかがやってくれる」じゃいけない。私がやりたい、やらなきゃいけないという意識をもつてもらわないと。そしてリーダーシップをもっている人を積極的に盛り上げていく、そういう社会にしていく必要があると思います。

さつて。大学でもフィールドでも、いろんな人に育てていただきました。

この学部に入ったから、いまこの選択をしたから将来の選択肢が狭まったというのではなく、いまいるところでもいろいろな可能性があると思つてほしいですね。若いうちは、将来への想像力を巡らせて前に進んでほしいなと思います。

**藤井** 研究をするなら、まず好奇心がないと何のために研究しているのかわからない。そして想